瀧口修造生誕120周年記念展示

ウィルソン・リンカーン・システムとしての〈本〉

本年は**瀧口修造**生誕120周年にあたります。それを記念し、**瀧口**資料を分有する富山県美術館と慶應義塾大学アート・センターでの共同企画展示を行います。

本展は富山県美術館（**瀧口修造**コレクション室）にて行われるとともに、慶應義塾大学（三田キャンパス東館6階G-Lab）で行われる**シンポジウム**とテーマを共有しています。

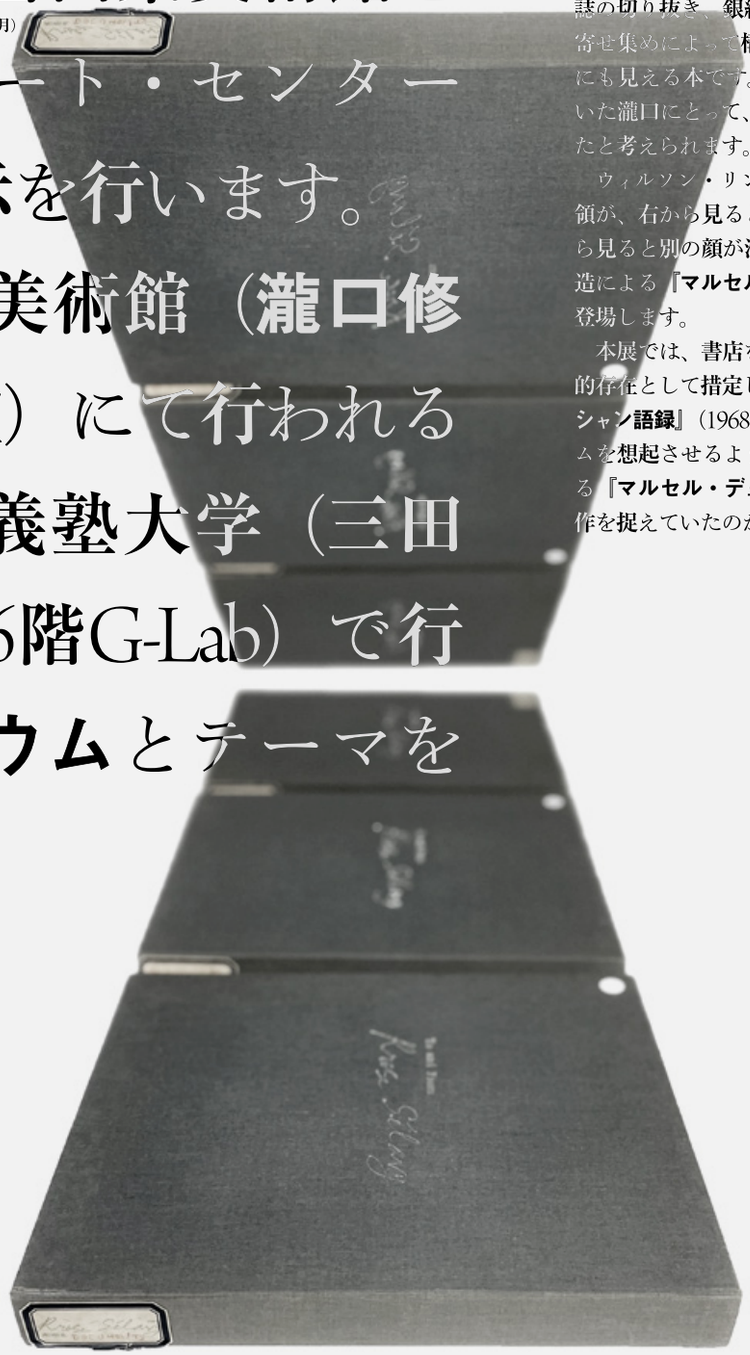
私の生きた足跡が、ついには本の形でしか残らない［…］私にはそれでもその書くことと直接結びついた独特の本をつくりたいという夢がある。書く様式までも変えてしまう奇妙な本、それを私はいつもゆめみる。――だが今度という今度は思いがけず、まったく別な本つくりを経験したのである。

――瀧口修造「本・もうひとつの本デュシャンの語録」（『芸術新潮』1968年10月）

詩人、展覧会のオーガナイザー、美術評論家、造形作家と多様な活動を繰り広げた**瀧口修造**（1903－1979）は、通称「**手づくり本**（handmade brochure）」と呼ばれる不可思議な本を制作しています。それらは出版社や印刷所のプロセスを経ていない、瀧口自身の手仕事による本であり、雑誌の切り抜き、銀紙、ラベル・シール、手書きのメモ等、いわゆる断片の寄せ集めによって構成され、完成されているようにも、未完成であるようにも見える本です。「**永遠に綴じられず、丁づけされない本**」を志向していた瀧口にとって、本が仮設的な状態にあることはとても重要なことだったと考えられます。

ウィルソン・リンカーン・システムとは、左から見るとウィルソン大統領が、右から見るとリンカーン大統領が見えるといった、左右それぞれから見ると別の顔が浮かび上がる二重の肖像画に似た仕組みであり、瀧口修造による『**マルセル・デュシャン語録**』にもデュシャンの用いた言葉として登場します。

本展では、書店を中心に流通する一般的な本と「手づくり本」とを対極的存在として措定し、その間で揺れ動く存在として**瀧口**の『**マルセル・デュシャン語録**』（1968年）を位置づけます。ウィルソン・リンカーン・システムを想起させるような、双極の間に現れる多重なイメージを持った本である『**マルセル・デュシャン語録**』を通して、瀧口がどのように「本」と制作を捉えていたのか、さらには「本」とは何かについて考えます。



『Rrose Sélavy Tokyo 瀧口修造：DOCUMENTS』
『Rrose Sélavy Tokyo 瀧口修造：MISCELLANIES』
『Rrose Sélavy Tokyo 瀧口修造：ORIGINALS』
（すべてpost-1968）：『マルセル・デュシャン語録』の箱を利用した瀧口の「手づくり本」

● 瀧口修造生誕120周年記念
ウィルソン・リンカーン・システムとしての〈本〉
2023年11月2日－2024年2月6日｜富山県美術館展示室6
開館時間：9時30分－18時（入館は17時30分まで）
休館日：毎週水曜日（祝日除く）祝日の翌日・年末年始※臨時開館・休館する場合があります
主催：富山県美術館、慶應義塾大学アート・センター

● 瀧口修造生誕120周年記念シンポジウム
瀧口修造研究会特別例会 パピエプリエ 01：蝶番のタブローをつくること（曲尺や書物などのように‥‥）
2023年12月9日、13時－16時｜慶應義塾大学三田キャンパス東館6階G-Lab
主催：瀧口修造研究会（慶應義塾大学アート・センター）

***瀧口修造研究会**：慶應義塾大学アート・センターでは、2001年にご遺族から資料をご寄贈いただいたことが機縁となり、「瀧口修造コレクション」を開設、そのアーカイヴ構築を現在も継続している。2021年6月からはさらなる研究・創作活動の活性化を目的とし、学内外の研究者・アーティストで構成された「瀧口修造研究会」を立ち上げた。

****パピエプリエ**：〈パピエプリエ（papier plié）〉とは、瀧口が「手づくり本」に準ずるものに付けた名称である。直訳すると「折り畳まれた紙」だが、折紙を指す場合もある。『シュルレアリスム簡約辞典』（1938）の「美しい死骸」の項目に、次のような説明がある。「いく人かの人間に、一句乃至はひとつのデッサンをかかせることでなりたつ、パピエプリエの遊び。」（アンドレ・ブルトン、ポール・エリュアール編『シュルレアリスム簡約辞典』江原順訳、現代思潮社、1971年、6頁。原文を参照しつつ一部訳語を変更した。）。遊びの最中、前の人が書いた／描いたものは折り畳まれて隠され、次の人は見ることができない。